

令和元年度 関東高等学校ソフトボール大会を前に

そもそもこのシリーズは前橋育英高校女子ソフトボール部が県大会を勝ち抜き、県代表として東日本大会や関東大会などの上位大会へ出場し、選手が活躍したことを世の中に出したいと願う作者の意図から始まった。

エピソードIから10年、エピソードIVから5年、時は流れ、選手は替わり、時代も平成から令和へ。平成最後の・・・から令和初の・・・というこの機に久しぶりにこの第五弾を出すことになる。

今回は大会前で、この後に続くインターハイ予選にも選手の活躍は期待できる、と確信している。となれば、待望の第六弾もすぐに出されると予想できる。

さて、本題のチーム状況や関東までの道のり、ここ数年の様子から紹介する。

今の三年生は入学当初20人が入部してきた。正直、こんなに入って大丈夫なのかと少しの不安はあった。数が増えれば、チームにとってプラスは増えるが、多ければ多なりに色々と大変なこともある。学年20以上というのは初めてだが、その布石はなくてはなかった。この二つ上の代は13人の入部で、これも多い方だが、そのうち半分以上が県外出身者で育英はソフトでも人気という形が表れた世代でもあった。このとき既に部員数は40人を超えていて、この時期からホーム&アウェーの試合形式で多くの経験を積んで来た。

姉が育英で妹も育英というのは昔からあり、今も何人もいる。通学地域も県内はおろか、県外からも通っている、中には下宿してまで育英でやりたいという子も出てきた。私も残り10年、その間に母が育英、子も育英という、家族で育英を愛し、育英のソフトで育つたと語り伝えて欲しい。

ここ数年の大会成績も非常に上がってきた。その要因として人数の増大は一つだが何より力強い(心強い)のは総監督ともいえるべき(部長・コーチなど様々な役割をしていただく存在)先生が協力していただき出してからである。副顧問というのは差し出がましいが、技術指導から精神指導まで、時には私自身の相談事も聞いていただき、面倒も見て下さっている。

先生も私も元々野球をしていたので、野球の特に阪神の話で盛り上がる。年に一度お盆の時期に、夏休みの遠征合宿も伴う古河フェスティバルという新チーム結成時のオープン大会があるが、その宿舎近くで指導者の夕食兼反省会を行われる。その場所はまさに阪神ファンが集う場所である。そこでは普段あまり宴会でも飲まれない先生と美酒を酌み交わしている。

そして、この大会では一年間チームの成果はどの程度なのかも予想できる。最初から上手いくことはあまりないが、試合数をこなしてきたことはそれなりの結果も求めたい。そこには埼玉栄が出場しているが、栄とどれだけできるかは、それも目安のひとつになる。

さらに保護者の応援・協力にはとても感謝している。大会の応援をはじめ、練習試合での審判から、昼食準備、大会運営の補助、グラウンド整備用レーキの補修、トレーニンググッズの作成など、ありとあらゆる雑用まで、本当にチームのために選手のために尽力して下さっている。これもやはり、三位一体でがっちりスクラムを組み一致団結して、「明るく 元気に 勝負に挑む」をスローガンに戦える状態にあることで、徐々にではあるが“ベスト4の壁”を破り、決勝進出や優勝もできるようになってきた。

“ベスト4の壁”これがまた長い間、我々が苦しめられてきたまさに障壁であり、今後とも簡単には崩れないやっかいな障害物である。

ソフトボールに関わってかれこれ20年以上を経過してしまった。一般的に優秀な指導者は五から七年程度その種目に関係すれば、一度や二度全国大会へ出場させ、成果を出すとと言われる。それから数えると人の三倍以上やっているのにまだ全国へ行ってないのかと叱られ、笑われる状況にある。毎年毎年、今年こそはと意気込み戦いに挑むわけであるが、敵も簡単には勝たせてくれない。あの時、こうしていればと思うことは数知れない。終わってみれば後の祭りとはこのことである。

最初の県内大会は夏季大会。これは先輩が残してくれたシード権を元に4ブロックに分かれ、リーグ戦を行い、各ブロックから上位二チームが決勝トーナメントへ進む。

ブロック1位で決勝トーナメントとなるところ雨天で中止。ある意味では優勝のチャンスを逃した。

次の全国につながる新人戦は準決勝で宿敵の健大高崎と対戦、結果は0-2だが、これも疑惑の残る試合であった。そのあとに東日本代表決定戦を市立太田と行ったが、これもまたタイブレーカーにて破れ、厳しい冬を迎えた。

と、その前に全国私学の関東大会予選が健大グラウンドにて健大と行われていた。この試合は、このチームの敗因の象徴的なゲームで初回から無駄なランナーを出し、エラーが止まらない、つまらない展開であった。

冬の収穫として一つ、この年は12月にゴム革ボールでミズノスポーツ主催の大会に参加した。高校以降は基本的に革ボールになるわけだが、ゴム革はその中間の球であり、打感や打球の速さはまさに革ボールで、バットはゴムボール用でも対応できるとのことである。この球は革なので若干大きく縫い目もしっかりしていて、手の小さい選手には馴染みにくいものであった、特に投手はゴムと同じようには投げられずに苦戦した。野手においてもボールの握りによっては全く投げられず、ゴロをアウトにするのもやっとならざるを得なかった。

年度末には熊谷カップに参加して、優勝を目前に千葉英和に敗れる。千葉英和とは古河で準々決勝で対戦し、タイブレーカーで勝っていたが、今回は涙をのんだ。

平成 31 年度 春季大会 初戦から準決勝まで、すべてコールド勝ち、決勝戦の対戦相手は市立太田、新人戦の東日本代表決定戦以来の対戦である。前回はタイブレーカー、今回もタイブレーカー、結果は 4 - 3 で勝利、二年ぶり 2 回目の優勝であった。

HP 掲載の号外(保護者作)の新聞や最後全体の集合写真を見てもらっても育英のすごさを実感できるものである。

そして、令和元年県高校総体兼関東予選、準決勝まではコールド勝ち、準決勝の対戦相手は高崎商業。この試合に勝てば関東大会出場決定となる、実は過去二回とも関東決めの準決勝は高崎商業、これもまた因縁の相手である。“ベスト 4 の壁”はここでも鎬を削っている。高商戦で先制は育英、その裏にすぐに取り替えされ振り出しとなり、このまま中盤を迎え、終盤までもつれ込むかに見えたが、4 回の五連続長短打で 3 点、5 回に 2 点、6 回表に 2 点で 8 - 1 のコールドの点差にしたものの、6 回裏に長打とエラーで 2 点返された、終わってみれば 8 - 3 であったが、点差ほど差は無いように思われる。

決勝戦は健大を想定していたが、市立太田となり、春季と同じ顔合わせである。

関東を決め少し気が緩んだのか、内容的にも結果的にも今ひとつ納得のいく展開にはならず、課題を残して大会を終えた。

先日、学校にて恒例の必勝祈願を野球部御用達中之嶽神社神主に行っていただき、これで満を持して大会に臨める。お守りには「頂」と書いてあり、これは神社が妙義山の山頂に位置し、勝ち抜いて頂点を頂くということであると説明され、鼓舞していただいた。

大会前にこの儀式を行えばベスト 8 以上は間違いない。前回は県優勝したその日にバスで神社へ行き、祈祷していただきベスト 8。その前の東日本大会の時も一部三位となり、必要不可欠な準備の一つである。

後は結果を待つのみで、第六弾でインターハイ出場の喜びを皆さんにご披露することとなるであろう。